

# Woong San / Temptation

ウンサン / テンペテーション  
誘惑

時にはクールに囁き、時にはソウルフルに歌いあげる無限の表現力が、心地よい余韻に満ちた深みあるサウンドに抱かれ、今世界に解き放たれた！

アジアのジャズ・ディーヴァ、ウンサンが放つコンテンポラリー・スムーズ・ジャズの新たな提示！

★リー・リトナー(G)、ネイザン・イースト(B)、日野皓正 特別参加！



2015年8月19日発売 ポニーキャニオン PCCY-50075 2,778円+税  
Ultimate HQCD 高音質CD

グローバルに活躍するギタリストJack Leeプロデュース  
ビル・ウィザーズ、サンタナ、ボブ・マーリー、トム・ウェイツ、アイズリー・ブラザーズ、マリーナ・シヨウなど個性的な楽曲を見事なコンテンポラリー・スムーズ・ジャズにアレンジ！

主なミュージシャン

Jack Lee: guitar

John Beasley/Charles Blenzig: piano, keyboard

Lewis Pragasam/Chris Coleman: drums 他

(株)ポニーキャニオン音楽事業本部 ストラテジック 山下正博 hiro@ponycanyon.co.jp

\*アレンジャー、各曲のクレジット確認必要

収録曲 ( writers ) オリジナル・アーティスト

**1. Use me** (Words & Music: Bill Withers ) Bill Withers  
(arranged by Jack Lee and Charles Blenzig)

Woong San: Vocal  
Jack Lee: Acoustic guitars  
Charles Blenzig: Piano, Organ  
Nathan East : Bass  
Charlie Jung: Electric guitar fills  
Lewis Pragasam: Drums  
Bohye Shin: Background Vocals

**2. The look of love** (Words & Music: Burt Bacharach/ Hal David) Dusty Springfield  
(arranged by Jack Lee and Charles Blenzig)

Woong San: Vocal  
Jack Lee: Electric guitars  
Charles Blenzig: Keyboards, Piano  
Melvin Davis : Bass  
Charlie Jung: Electric guitar fills  
Lewis Pragasam: Drums

**3. Get up, Stand up** Bob Marley  
(Words: Bob Marley / Music: Peter Tosh )  
(arranged by Jack Lee and Lee Ritenour)

Woong San: Vocal  
Jack Lee: Rhythm guitar  
Lee Ritenour: Electric guitar  
John Beasley: Piano  
Melvin Davis: Bass  
Chris Coleman: Drums  
Bohye Shin: Background Vocals

**4. Light my fire** The Doors  
(Words & Music: Jim Morrison, Raymond Manzarek, Robert Krieger, John Paul Densmore)  
(arranged by Jack Lee and Charles Blenzig)

Woong San: Vocal  
Jack Lee: Acoustic and Electric guitars  
Charles Blenzig: Keyboards  
Melvin Davis : Bass  
Lewis Pragasam: Drums

## 5. You hurt me

(Words & Music: Woong San)

(arranged by Woong san )

Woong San : Vocal

Kyungin Min : Keyboards, Clavinet

Hogyu Hwang : Bass

Charlie Jung : Electric guitar

Cheolwoo Park : Drums

Hisatsugu Suzuki : Saxophone

## 6. Black magic woman Fleetwood Mac/Santana

(Words & Music: Peter Green)

(arranged by Jack Lee and Charles Blenzig)

Woong San: Vocal

Jack Lee: Acoustic guitar, percussion programming

Charles Blenzig: Keyboards, Bass

Lewis Pragasam: Percussion

## 7. Papa was a rolling stone The Temptations

(Words & Music: Norman Whitfield/ Barrett Strong)

(arranged by Jack Lee and Woong san)

Woong San: Vocals

Jack Lee: Electric guitar

Lee Ritenour: Electric guitar (solo)

John Beasley: Piano

Melvin Davis: Bass

Chris Coleman: Drums

Terumasa Hino : Trumpet

Bohye Shin: Background Vocals

## 8. Night away

(music by Jack Lee, lyrics by Annekei, WOOJIN Music BMI)

(arranged by Jack Lee)

Woong San: Vocal

Jack Lee: Electric guitars

Lee Ritenour: Nylon guitar

John Beasley: Piano

Charles Blenzig: Keyboards

Melvin Davis: Bass

Chris Coleman: Drums

Norihito Sumitomo: Horn Section

Annekei : Background vocals

**9. Between the sheets** Isley Brothers

(Words & Music: Rudolph Isley/ O'Kelly Isley, Jr./ Ronald Isley/ Ernest Isley/ Marvin Isley/ Chris Jasper )  
(arranged by Jack Lee and Charles Blenzig)

Woong San: Vocal  
Jack Lee: Electric Guitars and solos (in the middle and outro)  
Charles Blenzig: all keyboards and Rhodes solo  
Nathan East: Bass  
Charlie Jung: Electric guitar fills  
Lewis Pragasam: Drums  
Bohye Shin: Background Vocals

**10. Loving you was like a party** Marlena Shaw

(Words & Music: Benard Ighner)  
(arranged by Jack Lee and Charles Blenzig)

Woong San: Vocal  
Jack Lee: Electric guitars  
Charles Blenzig: Keyboards, clavinet  
Melvin Davis : Bass  
John Beasley: Add.Keyboards  
Charlie Jung: Electric guitar fills  
Lewis Pragasam: Drums  
Bohye Shin : Background Vocals

**11. Temptation** Tom Waits

(Words & Music: Tom Waits)  
(arranged by Jack Lee and Charles Blenzig)  
Woong San: Vocal  
Jack Lee: Electric guitars  
Charles Blenzig: Keyboards  
Nathan East : Bass  
Lewis Pragasam: Drums

**12. Someday**

(Words & Music: Woong San)  
(arranged by Woong San)

Woong San: Vocal  
Kyungin Min: Keyboards, Clavinet  
Hogyu Hwang: Bass  
Charlie Jung: Electric guitar  
Cheolwoo Park: Drums

## ライナーノート

「あー、この曲か！」そう言いたくて音楽を聴いていることが、この数年多くなった。

カバー・アルバムが多いご時勢ならでは聴き方だと自分では思っている。

今の時代の空気の中で生まれた新曲を聴くのも悪くない。だが、60年代から70年代を経て、80年代にかけて、ワクワクしながら聴いて自分の中に入ってきた音楽は、まるでその時、自分の中にiPODでもあったのではないか、と思えるほど、鮮明に記憶の中にインプットされている。そんな名曲たちは時代を超えて、多くは新しいアレンジで生まれ変わっていて、最初のイントロだけではわからず、Aメロが始まった途端に、強力な磁力で自分の記憶の中の音楽と結びつく。

本作はまさに「あー、この曲か！」が連続する究極のカバー・アルバムでもある。

韓国の女性ジャズ・シンガー、ウンサンの最新アルバムであり、2013年にリリースされた『i love you』から1年8ヶ月ぶりの注目作である。

メジャー・デビュー作を発表して以来、日本のジャズ・シーンの第一線で活躍する気鋭のミュージシャンをバックにした、コンテンポラリー・ジャズ・アルバムをリリースしてきた彼女だが、本作はこれまでのアルバムとはやや趣きを異にする内容だ。

というのは、取り上げている楽曲は60年代～80年代に誕生したロック、ポップス、R&B、レゲエの名曲群がほとんど。そのプロデュースには“韓国のパット・メセニー”の異名を持つギタリスト、プロデューサーであるジャック・リー。そして参加ミュージシャンは豪華。ゲストにはフュージョン界のトップ・ギタリストであるリー・リトナー、ベースにはフォープレイの中心メンバーで知られるネイザン・イースト、そしてトランペットの日野皓正が名を連ねる。バックは海外の実力派ミュージシャンたちで、キーボードのチャールズ・ブレンジック、ジョン・ビズリー、ベースのメルヴィン・デイヴィス、ドラムスのルイス・プラガサムらジャック・リーとリー・リトナーのそれぞれのバンド・メンバーの混合チームともいえるような面々。

これらのメンバーゆえ、そのサウンドはコンテンポラリーでややスムーズ・ジャズ・テイストに溢れており、ウンサンのディスコグラフィーの中ではかなり洗練された一作といえよう。元々ビリー・ホリデイの歌に影響を受けてジャズ・ヴォーカルを志した経緯がある彼女だが、いつも心のどこかで、フォープレイのようなスムーズ・ジャズにも憧れをもっていたようで、今回はその夢が実現したということになる。

このスムーズ・ジャズ・プロジェクト始動のきっかけはジャック・リーとボブ・ジェームスの2009年の共演盤『ボレロ』の中の1曲“エイプリル”にウンサンが深くインスパイアされていて、ジャックに相談を持ちかけたことによる。それにより、2014年の韓国での

コンサート『Sweet Jazz Fantasy Woong san & Lee Ritenour』でリー・リトナーとの共演によるスムーズ・ジャズの豪華ライブが行われ、アルバム・リリースの話が持ち上がったのだ。

持ち味のソウルフルな歌声とゴージャスなメンバーによるスムーズ・ジャズ・サウンドとのランデヴー。そんな1曲1曲が興味深い今回のこのアルバム、曲を順に追っていくことにしよう。

### 1. Use me

R&Bシンガーのビル・ウィザーズの1972年のヒット・ナンバー。オリジナルはクラヴィネットのリフが印象的（本トラックではギターとピアノによる）。ビル・ウィザーズといえば1980年のグローヴァー・ワシントンJrとの“ジャスト・ザ・トゥ・オブ・アス”もクリスタルな世代には懐かしい。アレンジはジャック・リーとキーボードのチャールズ・ブレンジック。ネイザン・イーストのグルーヴィなベースも絶品。ウンサンのソウルフルなヴォーカルがグイグイと盛り上げる。

### 2. The look of love

バート・バカラック作曲のムーディな名曲であり、元々は66年の007映画『カジノ・ロワイヤル』のために書かれ、イギリスの女性シンガー、ダスティ・スプリングフィールドが歌ったものがオリジナル。ダイアナ・クラールらのジャズ・カバーも有名。こちらもジャック&チャールズのアレンジによる。ウンサンのスムーズなヴォイスが物憂げな都会の雰囲気伝える。

### 3. Get up, Stand up

1973年のボブ・マーリーのザ・ウェイラーズ名義のアルバム『バーニン』の1曲目に収録されているナンバー。アレンジはジャックとリー・リトナー。リー・リトナーのギター・ソロもバッチリとフィーチャーされており、2001年のリトナー自身のボブ・マーリーのカバー・アルバム『ア・ツイスト・オブ・マーリー』の中で同曲を取り上げていたのが思い出される。洗練されたレゲエのリズムの上をウンサンがうねるように歌う。

#### 4. Light my fire

ジム・モリソンが在籍したザ・ドアーズの1967年のナンバー。オリジナルはレイ・マンザレクのオルガンのイントロが印象的なややアップナーなアレンジが特徴だが、ここではジャックのアコースティック・ギターも取り入れたボッサのフレーヴァーが漂う、クール・ダウンしたアレンジが施されている。ウンサンもささやくような歌唱で温度を下げる。

#### 5. You hurt me

本作ではウンサン自身のオリジナルは2曲収録されており、その内の1曲がこちら。バックのメンバーはほぼ韓国人のプレイヤーで長年ウンサンと行動をとともにしてきた盟友たち。ソプラノ・サクソには過去にウンサンのレコーディングでもお馴染み、大野雄二&ルパンティック・ファイヴで活躍中の鈴木央紹が参加。ジャジー・ボッサ風のリズム・アレンジに、シンプルなマイナー・コードの繰り返しのコード進行の上をウンサンが情感をこめて歌い上げる。

#### 6. Black magic woman

この曲はサンタナの1970年のヒットのおかげもあり、ラテン・ロックの名曲として知られているが、原曲はフリーウッド・マックが1969年に発表したもの。サウンド、リズムともにオリジナルとは一味違ったアレンジで、ジャックのアコギ、チャールズのキーボード&ベース、ルイス・ブラガサムのパーカッションというシンプルな編成でジャジーに聴かせている。

#### 7 Papa was a rolling stone

これまで数々のカバーで知られる名曲で、テンプテーションズの1973年のヒット・ソング。ジャック・リーとウンサンによるアレンジも粋であり、イントロが始まるやいなや、日野皓正のフリーキーなトランペットが響きわたる。ソウルフルなウンサンのヴォーカルがワン・コーラスを歌い上げると、今度はリー・リトナーのボトルネックによるギター・ソロが続く。2コーラス後に日野皓正のソロが再び炸裂。メルヴィン・デイヴィスのスラッピング・ベース・ソロもフィーチャアされ、どんどんヒート・アップしてゆく様は圧巻。

#### 8. Night away

ジャック・リー作曲のアーバン・テイストに満ちたオリジナルで、作詞はジャジー・ポップ系女性シンガーのアンナ・ケイ。ジャックとアンナはかつてレコーディング、ライブで共演した仲だ。ギターはエレクトリック・ギターがジャック、ナイロン弦アコースティック・ギターがリー・リトナー。ピアノにはジョン・ビーズリー、ホーン・セクションは住友紀人が担当。そしてアンナ・ケイのバックグラウンド・ヴォーカルも聴ける。ウンサンはソフトなハイトーンでスウィート&ゴージャスにきめる。

#### 9. Between the sheets

コーラス・ワークの美しさが光るアイズレー・ブラザーズの1983年の人気曲。ハーフタイム・シャッフル風の16ビートのドラムスに、ズーンとした低音でからんでくるネイザン・イーストのベースは聴きもの。ジャック・リーの巧みなギター・ソロ、オブリガートも随所にちりばめられ、スムーズ・ジャズ・サウンドの中に映えるウンサンのアトモスフェリックなヴォーカルが素晴らしい。

#### 10 Loving you was like a party

ソウル・ジャズ・ディーヴァとして今なお人気のあるシンガー、マリーナ・ショウの1974年の人気アルバム『フー・イズ・ディス・ビッチズ・エニウェイ』の中の1曲で作曲はプロデューサーのベナード・アイグナーによるもの。オリジナルのディープなフィーリングを損なうことなくウンサンは表情豊かな歌唱で、クラヴィネットがフィーチャアされるファンキーなアレンジの中、見事に歌い上げる。

#### 11 Temptation

孤高のシンガー・ソングライター、トム・ウェイツの1987年発表のアルバム『フランクス・ワイルド・イヤーズ』に収録のナンバーでオリジナル・ヴァージョンでは本来シャガレ声のトム・ウェイツがキテレツなファルセットで歌い上げているのが魅力。ここでのウンサンは時にルーズに、時にタイトにヴォーカルをコントロールしてみせる。どっしりとしたベース・ラインはネイザン・イースト。ジャック・リーのギター・ソロが光る。

## 12 Someday

ラストはウンサンの2曲のオリジナルのうちのもう一つ。バックは気心しれた韓国のミュージシャンたちが参加。彼女にしてみれば、自身の曲ゆえ、自分の感情を上手く表現できるメンバーとやりたかったとのこと。8分の6拍子のゆったりしたリズムとカントリー・サイドの情景を思わせるサウンドが魅力であり、まさに本作のクロージング・ソングにふさわしい。「さよならなんて言わない。ずっといっしょだから」

本作はウンサンの新境地であり、新たな方向性を打ち出したものといえそうだ。

ウンサン&スムーズ・ジャズ・サウンドで、もっと他のいろいろな洋楽名曲カバーも聴いてみない？という“誘惑”がこのアルバムにはいっぱい詰まっている。

2015年7月

馬場 雅之

# Woong San

## Profile

シンガー／ソング・ライター／コンポーザー

艶やかさとスモーキーさを併せ持つ詩的ボイスと、独特の柔らかいオーラで聴衆を魅了する最高のヴォーカリスト、Woong San。

学者の父のもとで育ち、17歳から寺院での修行に入るといった特異な経歴を持つ。

修行中に授かった法名、それが「Woong San(雄山)」であり、厳しい修行中のある日、無意識の中で自分が「歌」を口ずさんでいることに気づく。

その後寺院のある山を下り、歌手への道を歩み始める。

当時選んだジャンルはROCKであったが、ジャンルにとらわれず好奇心旺盛に音楽を学ぶ彼女に友人から偶然に手渡されたビリー・ホリデイのレコードが、彼女の運命を大きく変える。それがJAZZとの運命の出会いであった。

そこからは、数々のライブ、舞台、楽曲制作に積極的に臨み、ファンを徐々に獲得。

2004年、1stアルバム「Introducing Woong San」(韓国盤はEMIレーベル「Love Letters」)が、日韓で同時発売され、「韓国最高のJAZZシンガー」という確固たる地位を築き、日本国内でも注目を浴びた。

2007年、13曲中7曲がオリジナル(作詞・作曲)制作の3rdアルバム「Yesterday」(韓国盤)を発表。Jazzの枠を超えた人気を裏付けるセールスを記録し、「**韓国大衆音楽授賞式 Jazz&Crossover 最優秀音盤賞**」「**韓国大衆音楽授賞式 Jazz&Crossover 最優秀歌(yesterday)**」を受賞。

2008年7月には日本全国ツアーを敢行。日本で人気のミュージシャン、TOKU、小沼ようすけと共に「Jazz Super Express Project Band」に参加、Blue Note や Billboard Live を始め日本全国において公演を行ない、その可能性はより広がりを見せ、ツアーを大成功させる。**韓国人でブルーノート、ビルボードライブのステージに立ったのは初の快挙！**

2008年12月「Feel Like Making Love」(韓国盤は「Fall in Love」)を日本メジャーデビュー第一弾アルバムとしてポニーキャニオンより日韓両国で発表。着実にファンを増やし、日本国内での評価を獲得した証とも言えるメジャーレーベル移籍となった。

2009年1月ビルボード福岡、ブルーノート名古屋を含む全国CD発売記念ツアー、7月に国内最大級のジャズ・フェスティバル“サッポロシティ・ジャズ・フェスティバル”へ自身のバンドで出演を果たす。



2009年12月「Close Your Eyes」で**スイングジャーナル誌選定ゴールドディスクを受賞**。日本のジャズ・ヴォーカルの中でもその実力を認められることとなる。

2010年3月「Close Your Eyes」を韓国でHQCDと一般の2つのフォーマットで発売、両方あわせて5000枚弱のセールスを達成。市場規模が日本の20分の1と言われる韓国においてこれは大変な快挙となった。CD発売記念コンサートはソウル・世宗文化会館で3月に2日間開催され、3,300人のホールが超満員になり、その模様は国営放送KBSが収録し、放送されました。

2010年10月「Once I Loved」を発売。ゲストとして日本を代表するトランペッター日野皓正が参加。

2012年2月「Tomorrow」を発売。このタイトル曲のTomorrowは、東日本大震災被災地へ真心を込めて書いたオリジナル曲。またNHKのドキュメンタリー番組「TOMORROW beyond 3.11」へ出演し、岩手県大槌町を訪れ、大槌高校吹奏楽部の学生と楽曲「Tomorrow」を通して交流。

2013年12月「I Love You」を発売。

2015年8月「Temptation」を発売。グローバルに活躍するギタリストジャック・リーをプロデューサーに迎え、リー・リトナー、ネーザン・イースト、日野皓正が特別参加しているなど豪華な内容となっている。

1998年から日本での活動を始め、今まで700回も越える公演と1年間4回ほどの全国ツアーを行ってきた。

実力と美貌を兼ね備えたヴォーカリスト、それがWoong San。